

pramāṇabhūta の意味の変遷

小 野 基

はじめに

Dignāga (ca. 480–540) の Pramāṇasamuccaya (=PS) 帰敬偈に登場する世尊の形容句 pramāṇabhūta は、仏教知識論における「知としてのプラマーナ」(=直接知覚と推理)と仏智の関係を論じる上で最も重要な概念である。フェッター博士はこの語を「プラマーナである」と訳すべきとし、「プラマーナになった」という訳は Pramāṇavārttika (=PV) における Dharmakīrti (ca. 600–660) の解釈に基づくもので、PS 自体の文脈では正当化され得ないとした (VETTER 1984: 14)。だが pramāṇabhūta を「プラマーナである」と理解した場合、フェッター博士自らが述べたように、Dignāga はなぜ人格としての世尊を知であるはずのプラマーナと呼んだのかという疑問が生じる。この問題提起を受けて pramāṇabhūta とこの複合語の後分の bhūta の用例を検討し、Dignāga がこの語に込めた意味を探求したのがルエッグ博士であった。本稿では、ルエッグ説の妥当性を吟味すると共に Dharmakīrti と Prajñākaragupta (ca. 750–810) の解釈を考察し、pramāṇabhūta の語に託された意味の変遷を跡付けることで、仏教知識論における知としてのプラマーナと仏智を巡る思想史の一断面を解明したい。

Dignāga

インド古典全体でみれば Patañjali (ca. 150 BC) が Mahābhāṣya で ācārya を形容するのに用いたのが pramāṇabhūta の最古の用例である。後代の註釈者 Kaiyaṭa (11c.) はこの複合語を「プラマーナ性を備えた = 権威である」(prāmāṇyaṃ prāptaḥ) の意味に解釈した。ルエッグ博士によれば、Mahābhāṣya 註釈者達の定説では複合語前分の pramāṇa は権威を意味し後分の bhūta は冗語的用法(「である」と理解されている。これに対し文法学の文献では一般に複合語の後分の bhūta が比喩の意味(「如き」)を持つと説明する場合がある。Bhartṛhari (5c.) も Mahābhāṣya 註で複合

語 *sāmānyabhūta* に関し後分の *bhūta* をそのように説明する。ルエッグ博士は比喩の意味の *bhūta* の用例が *Dignāga* 以前に確立している点に注目し、また後代の仏教知識論の註釈者たちも *pramāṇabhūta* の中の *bhūta* の語を比喩の意味を持つと解釈したと考えた。こうしてルエッグ博士は *bhūta* を比喩の意味にとった上で *pramāṇabhūta* を「プラマーナの如き」と解釈すべきとする。その場合には *Dignāga* は世尊をプラマーナに喩えてはいるが等置してはいないことになるので、なぜ世尊が知であるはずのプラマーナと呼ばれるのかという疑問の余地はなくなる、というのがルエッグ説の趣旨であった (RUEGG 1994)。

以上のルエッグ説にクラッサー博士が反論した。彼は、研究者達が「なぜ世尊が知であるはずのプラマーナと呼ばれ得るのか」という問題の説明のために、① *pramāṇabhūta* の前分の *pramāṇa* の語は「権威」のような拡張的な意味を持つ、② *pramāṇa* の語は比喩的に理解されるべき、③ 後分の *bhūta* の語は比喩の意味をもつ、との三種の見解を主張してきたとした上で、第三説＝ルエッグ説を批判する。彼が俎上に載せたのは、後代の註釈者達も *bhūta* を比喩の意味に解釈しているとするルエッグ博士の見解であった。彼は *Jinendrabuddhi* (ca. 8c.) が全く逆の解釈をしていることを新出の *Pramāṇasamuccayaṭīkā* 原典に基づいて解明した。すなわち *Jinendrabuddhi* の *bhagavān pramāṇam iva pramāṇam* (tshad ma dang 'dra bas bcom ldan 'das tshad ma'o) という言明は、「世尊はプラマーナである」と述べただけで「如く」が含意されるという意味である。クラッサー博士は、「*Jinendrabuddhi* によれば、*pramāṇa* の語は世尊に対して比喩的に用いられており、また比喩として理解されるのにいかなる限定詞も必要としない」と論じた (KRASSER 2001)。

だがクラッサー博士はルエッグ説が当該の註釈から実証されないことを示したに過ぎない。一方で、彼はまた *bhūta* が比喩の意味を担うとする解釈の存在を示唆する *Vibhūticandra* (11c.) の言明を確認してもいる。ルエッグ説が正しい可能性は依然として残る。さらに、複合語 *pramāṇabhūta* のどの部分が比喩の意味を担うのかは問題ではないとも言える (STEINKELLNER 2003: n.15)。重要なのは、*bhūta* を冗語法と見て「権威である」と訳すべきとの見解と *pramāṇabhūta* が全体として「プラマーナの如き」を意味するという見解の間の相異であり、その際両博士の示した資料がいずれも後者の見解を支持する点である。

実は、複合語 *pramāṇabhūta* が全体として「プラマーナの如き」を意味するという解釈が *Prajñākara* の *Pramāṇavārttikālamkāra* (=PVA) に対する *Jayanta* (10c.) と *Yamāri* (11c.) の註釈に言及されている。*Jayanta* は、「全てを遍充する結合関

係は一切智者でないものによっては把握され得ない」という PVA の言明 (PVA_o 12, 12ff.) を説明して、「世尊はプラマーナの如くであるから pramāṇabhūta である (*bhagavān pramāṇam iva pramāṇabhūtaḥ), との (誤った) 考えを懸念して」(J 39b7-8: bcom ldan 'das ni tshad ma dang 'dra bas tshad mar gyur pa yin no zhes bya ba'i bsam pas dogs pa la), Prajñākara は全てを遍充する結合関係を認識する世尊こそが第一義的なプラマーナであるとの趣旨を説いたのだ、と言う。Yamāri も PVA 帰敬偈中の pramāṇabhūta の語の解釈可能性を提示する中で、「或いは (世尊は) プラマーナの如くであるから pramāṇabhūta である」(Y190b2: yang na tshad ma dang 'dra bas (D: tshad ma dang 'dra bas lacks P) tshad mar gyur pa ste) と言う。これらは、比喩の意味を表す部分を特化せずに pramāṇabhūta 全体を比喩の意味で理解する解釈が存したことを示している。

以上から、Dignāga における複合語 pramāṇabhūta の原意は「プラマーナの如き」という比喩の意味であったとみてよい。これは、特定の存在論に囚われない普遍的な論理学の確立を目指した Dignāga の立場に合致する。彼は、知としてのプラマーナを PS における第一義的なプラマーナと考えていたと言えよう。

Dharmakīrti

他方、Dharmakīrti は PS の pramāṇabhūta に言及し「bhūta という語は不生を排除するためである」(PV II 7bc': abhūtaviniṣṭtaye bhūtoktiḥ) とした。これに基づき註釈者達は pramāṇabhūta を「プラマーナであり、かつ生成したもの」と持業釈として説明する。これが pramāṇabhūta を「プラマーナになった」と訳す根拠となった記述である。だがここでの Dharmakīrti の意図は pramāṇabhūta という語に立脚して他学派に対し仏教の「無常なるものこそがプラマーナである」という教義を正当化することであり、pramāṇabhūta の語義解釈ではない。また Dharmakīrti は著作中で pramāṇabhūta という語を一度も用いていない。pramāṇabhūta は Dharmakīrti の文脈ではどう訳されるべきか、という問いは疑問問題に過ぎない。

PV の Pramāṇasiddhi 章の目的は、知としてのプラマーナを定義した上で、それが世尊にも成り立つことを証明することであった。知としてのプラマーナと世尊は同一の定義によって定義されるプラマーナに他ならず、それゆえ Dharmakīrti は PV では世尊を単にプラマーナと呼び、pramāṇabhūta という語を用いない (PV II 32-33: 145-146ab)。他方彼は Pramāṇaviniścaya では「世俗のプラマーナ」(sāṃvyavahārikapramāṇa) 「勝義のプラマーナ」(pāramārthikapramāṇa) という語を用い、「世俗」「勝義」という限定を加えた上で知としてのプラマーナと世尊 (の知) の双方を

プラマーナと呼ぶ。世尊は pramāṇabhūta ではなくプラマーナに他ならない。つまり、彼は pramāṇabhūta を pramāṇa の同義語と理解し（この点では bhūta は冗語法と理解されている）、他方で「生成」を読み込むことで bhūta の語を意味づけた。後者は複合語解釈としては無理があるが、教義的背景から大きな影響力を持ち、以後 Dharmakīrti 独自の pramāṇabhūta 解釈と目されることとなった。

Prajñākara Gupta

Prajñākara は Dharmakīrti とは異なり pramāṇabhūta の語を自身の思想の鍵概念として採用するが、他方その語に託した意味内容は Dignāga とは異なる。Dignāga との立場の違いは、PVA 冒頭で PS を祖述する際に付加された文章から明確になる。「(世尊が) 論書の目的だから、ここで基礎づけられるのは pramāṇabhūta である世尊に他ならない」という付加は、pramāṇabhūta である世尊こそが PVA の主題であるとの意味である。また「世尊こそがプラマーナである。なぜならプラマーナの定義が当てはまるから」という付加は、世尊のみがプラマーナの定義を十全に満たす真のプラマーナであるという Prajñākara の見解を先取する (PVA₀ 1,10ff.). Dignāga とは対照的に、Prajñākara では知としてのプラマーナではなく世尊 = pramāṇabhūta が第一義的なプラマーナなのだ。他方、Dharmakīrti では世俗と勝義のプラマーナは対象領域を異にしながら並存するのに対し、Prajñākara は勝義のプラマーナを直接知覚を本性とする至上のプラマーナ (param pramāṇam) と呼んで世俗のプラマーナより上位に置く (PVA₀ 83,15ff.). Prajñākara にとっては、発生の時点でプラマーナ性が保証される知覚は原因が完全である世尊の知覚のみであり、また推理に関しても全ての場合を尽くす遍充関係が確定されるためには世尊の一切智が要請される為、究極的には世尊のみがプラマーナとして十全である。

以上の Prajñākara の世尊観は、彼が pramāṇabhūta に「真正のプラマーナ」の意味を読み込んだ可能性を示唆する。チベット訳 tshad ma yang dag は核心を突いているのだ。だが Prajñākara 自身も註釈者達も bhūta が「真正」を意味すると明示的には論じていない。PV II 7bc' に対する Prajñākara 独特の解釈「非真実の除去のために (世尊は) 真実を説いた」(PVA₀ 84,4ff.) は PS の bhūta を「真正な」と理解することを支持するかに見えるが、Prajñākara の意図は bhūta の語義解釈ではない。では Prajñākara は pramāṇabhūta という語をどう理解したのか。それを推測する手がかりは Yamāri 註にある。

Yamāri は PVA 帰敬偈の pramāṇabhūta の語を「プラマーナに属する (*pramāṇam

gatah) 或いはブラマーナ性を備えている (*prāmānyam prāptah) との意である」(Y 188b6: tshad mar gyur pa ni tshad mar red pa 'am tshad mar thob pa'o) と註釈する。bhūta を冗語法と理解するのである。上述の pramāṇabhūta を比喩と理解する別解釈はこの箇所以後続する。さらに彼は前述の PVA の「ここで基礎づけられるのは pramāṇabhūta である世尊に他ならない」という箇所に対して、「pramāṇabhūta とはブラマーナに属するとの意である。生成の接尾辞 (*cvipratyaya) は、以前にそうでなかったものになる (*abhūtatadbhāva) (という意味を表すが、それを) 述べることは意図されていないので、存在しない」(Y 198b5-6: tshad mar gyur pa ni tshad mar red pa zhes bya ba'i don to || ma byung ba las byung ba ni yin yang brjod par mi 'dod pa'i phyir rtsi ba'i rkyen med do ||) と註釈する。すなわち彼は、生成の接尾辞が存在しない、つまり pramāṇabhūta という語形でない以上、生成の意味を表すことは意図されていないとして生成を読み込む解釈を批判し、翻って pramāṇabhūta を冗語法的に読むべきとするのだ。なお、ここでの Yamāri の論拠は文法学派との影響関係を示唆する。

このように、Yamāri は pramāṇabhūta について、Dignāga の原意と考えられる比喩とする解釈と Dharmakīrti による生成を読み込む解釈の双方を批判しつつ、Prajñākara の思想に合致する冗語法的解釈を主張している。すなわち、この解釈は必ずしも「真正」の意味と相反しない。シュタインケルナー博士が示唆するように、「真正」の意味は「である」から派生し得るからである (STEINKELLNER 2003: n.15)。Yamāri は、bhūta を冗語法と解釈することで、それが Prajñākara の思想に合致する「真正」の意味に派生することを可能にした。彼の解釈は Prajñākara 自身の解釈でもあったと理解できよう。

〈文献と略号〉 J: *Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā* (Jayanta), D 4222, De 巻; PVA₀: MOTOI ONO, *Prajñākaraguptas Erklärung der Definition gültiger Erkenntnis. Teil I*, Wien: Verlag der ÖAW, 2000; Y: *Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā* (Yamāri), D 4226, Phe 巻; KRASSER 2001: HELMUT KRASSER, "On Dharmakīrti's Understanding of pramāṇabhūta and His Definition of pramāṇa." *WZKS* Bd.45, 173-199; RUEGG 1994: D. S. RUEGG, "Pramāṇabhūta, *Pramāṇā(bhūta)-puruṣa, Pratyakṣadharman and Sākṣātkṛtadharman as Epithets of the Ṛṣi, Ācārya and Tathāgata in Grammatical, Epistemological and Madhyamaka Texts," *BSOAS* Vol.57/2, 303-320; STEINKELLNER 2003: ERNST STEINKELLNER, "Once more on Circles," *JIPh* Vol.31, 323-341; VETTER 1984: TILMANN VETTER, *Der Buddha und seine Lehre in Dharmakīrtis Pramāṇavārttika*, Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

〈キーワード〉 pramāṇabhūta, Dignāga, Dharmakīrti, Prajñākaragupta, Jayanta, Yamāri
(筑波大学人文社会系准教授, Dr. phil.)